

2020年12月27日 礼拝説教要旨
詩編講解説教41「思いやりのある人」
詩編41：2～4、マタイ5：7

150編の詩編ですが、これを五巻に分けることができます。その第一巻が41編で終わります。ちなみに第二巻は42～72編、第三巻は73～89編、第四巻は90～106編、107～150編が第五巻という分け方になります。今日は2020年最後の礼拝となりますが、この年の最後にわたしたちは詩編の第一巻を読み終えることとなります。今年は大変な年でした。世界中でウイルスが蔓延するという事態になりました。大きなパンデミックとしては約1000年前のスペイン風邪以来のものとなります。そういう歴史的な節目がこの2020年でありました。この年をどういう御言葉で終わるのか。またどういう御言葉を聞いて新しい年を迎えるのか。それは大切なことではないでしょうか。

詩編第41編は「いかに幸いなことでしょうか」と始まります。これは第一巻の冒頭、第1編もそうでした。「いかに幸いなことか。神に逆らう者の計らいに従って歩まず、罪ある者の道にとどまらず、傲慢な者と共に座らず、主の教えを愛し、その教えを昼も夜も口ずさむ人」(1：1～2)人間にとって幸いとは何か。改めてこの年の最後にそのことを考えます。詩編の第一巻は「主の教えを愛し、その教えを昼も夜も口ずさむ人」と教えることから始まる。そして最後は「弱いものに思いやりのある人」となります。この二つのことは結びつかないように感じるかもしれません。「主の教えを愛する」というのは非常に崇高なことであるのに対して「弱いものを思いやる」というのは人間同士の身近な問題です。でも主イエスが福音書で教えられたように神さまを愛することと隣人を愛することは一つのことです。ですから主の教えを愛することと弱いものを思いやることも一つのことなのです。ではどのようにしてこの二つのことが結びつくのか。

先週はクリスマスの礼拝をまもりました。クリスマスというのは、ヨハネが「言は肉となってわたしたちの間に宿られた」(1：14)と伝えるように、神さまの言葉の受肉なのです。神さまの言葉が具体的な形となること。それはイエスさまのことでわたしたちと関係ないと思われるかもしれませんが、そうではありません。わたしたちにも神さまの言葉は受肉する。それがクリスマスの秘義、受肉の秘義です。わたしたちの存在を通して、神さまの言葉はこの世に現れるのです。形になります。それは何よりキリストに結ばれること、洗礼によって、わたしたちにもたらされる恵みであり賜物です。クリスマスの出来事は他でもないわたしの出来事なのです。そのことを詩編も伝えています。主の教えを愛すること、それがキリストという神さまの言葉と結ばれることですが、そのことで弱いものを思いやるという具体的な働きがわたしたちを通して現れてくる。教会の言葉で言えば、それが「聖化」ということであり、キリストの命をこの身に宿し生きるということです。

「いかに幸いなことでしょうか。弱い者に思いやりのある人は」「弱いものを思いやる」これこそキリストの命そのものです。「思いやり」と訳された言葉は元々「洞察する、聡明である」という意味があります。口語訳は「貧しい者をかえりみる人」と訳しますし、新改訳は「弱っている者に心を配る人」と訳します。何れにしても、弱い者、貧しい者を慮ることができる、労わることができることです。それは相手に対して、その痛みを想像することができる聡明さと理解できるでしょう。

イエス・キリストはわたしたちの弱さを知るために真の人となられ、貧しい飼料桶に生まれられ、最後は十字架で死なれた。そのようにしてわたしたち弱いものにどこまでも寄り添われたのです。知らぬふりをするのではなく、最大限の思いやりをお示しになられた。わたしたちは洗礼を受けてそのお方に結ばれているのです。ですからわたしたちの思いやりは自分の中から出てくるものではなく、キリストからくる思いやりです。一人一人がこの真の思いやりに生きる時、この社会はもっと変わるのではないのでしょうか。

わたしたちの生きている社会は弱いものに対して思いやりがない社会です。弱いものに冷たい社会です。弱いもの、貧しいものを自己責任であるとか、自業自得と言って突き放す。その社会の表れが先月東京で起きた路上生活をしている人を「いなくなればいい」と思って殴って死なせたあの事件です。それはわたしたちの問題です。いかに思いやりがないか。自分のことしか考えていないかということです。このコロナ禍もそういう社会の冷たさを露呈しました。罹患した人に対する差別、医療従事者に対する差別が後を絶ちません。病気になって、それだけでもしんどい思いをしているところに、そういう差別が追い打ちをかける。そういう人の痛みや弱さを理解することができない。想像できない。それだけ他者が不在なのです。今こそ、この思いやりの心を取り戻さなくてはなりません。これがこの年を終える時に、病で身も心も傷ついた世界に与えられた御言葉です。

「主よ、その人が病の床にあるとき、支え、力を失って伏すとき、立ち直らせてください」（4節）原文を直訳すると、「主は病いの床の上で彼を支える。あなたは彼の病の中でも、その寝床をひっくり返される」となります。「寝床をひっくり返す」というと驚かれるかもしれませんが実際そういう言葉なのです。そこを新共同訳は「立ち直らせてください」と訳したり、聖書協会共同訳では「あなたはその床を新たに変わってくださる」と訳します。イギリスのある注解書にこういう解説がありました。「神は彼の傍に、言わば枕辺に座し、有能なやさしい看護師のように、汚れたシーツを替えることさえ厭わないのである。ここで神は訪問看護者となる」

寝床をひっくり返すというのは、シーツ交換をしたり、介護をされる方はよくご存知と思いますが、褥瘡、床ずれにならないように体位変換をすることと理解することもできます。相手が気持ちよく休むことができるためにお世話をします。そういう心配りが求められているのです。それは大変なことですが、でもそういう日々の積み重ねこそ、実はわたしたちの幸いにつながっているのです。それはそういうお世話だけではない。相手をいたわる言葉、ちょっとした日々の行動の積み重ねが幸せをつくっている。これからの時代、そういう思いやりの心が一層求められているのではないのでしょうか。今日の御言葉をしっかりと心に留めて、新しい年もこの主の思いやりに少しでも生きることができればと思います。